中国
登山クラブ会報

発行責任者
中国
登山クラブ

雪の下蒜山でしりもち

登山クラブは四月八日に庄原の葦嶽山、九日に下蒜山に登った。参加者は七人と少なかったが、天候に恵まれ、楽しい登山となった。雪の大山に大感激。レポートをC・Mちゃんが書いてくれました。

今日は山の会の人たちと山登りをする日です。

朝いく時車の中で、お父さんが、

「いままで一番つかれた山は？」

ときいたのでわたしは、

「ひょうのせん」

といいました。

ひょうのせんは、ちゅうごくちほうで、大山のつぎに高い山なのでつかれたけど、けしきはすごくよかったです。

まちあわせばしょへつくとまだ九時でした。しゅうごう時間は九時三十分なのに、三十分も早くついてしまいました。Iのおねえさんたちは、九時十五分にきました。ぜんいんそろったので、よていよりすこし早くしゅっぱつしました。今日のぼる山は、あしだけ山です。ちょう上まで、一時間くらいの山です。岩がすこしあってむずかしかったけど、昼ごはんを食べるところにつくと、岩がテーブルのようになっていて、つかいやすかったです。

あしだけ山からおりたあと、大山がよく見えるところへいって、おかしを食べ、せきがねおんせんへいってとまりました。

おんせんにIのおねえさんといっしょに入りました。おんせんは、ろてんぶろもあるのかと思っていたけどありませんでした。今日、山の会にきた人は七人です。しゅくしゃで同じへやになったのは、お父さんとIのおねえさんと、Nのおじちゃんとわたしです。

おんせんに入ったあと、夕ごはんを食べました。ひろいへやに、ちょこんと七人分のごはんがおいてありました。しゅくしゃからは大山がすごくきれいに見えました。

次の日は、しもひるぜんへのぼりました。ひるぜんは大山のちかくの山なので雪がまだいっぱいのこっていて、二回くらいスキーみたいにすべったり、しりもちをついてしまいました。ちょうじょうはすごくさむくて、ぶるぶるふるえてしまいました。大山がきれいに見えました。それからあついコーヒーとこぶちゃをのんで、また、山をおそるおそるおりました。

それから車で、ジャージーランドへ行きました。ジャージーランドの名前は、ジャージーという牛がいるのでそういう名前です。そこのレストランで昼ごはんを食べました。

ごはんを食べたあと、ジャージーのミルクで作ったソフトクリームを食べました。それから車で帰りました。つかれたのでねました。

家についたらお母さんが

「どうだった？」

ときいたのでわたしは、

「たのしかった」といいました。ほんとうに楽しい二日でした。

（C・M）

葦嶽山山頂のC・Mちゃんとパパ

雪の大山に大感激の下蒜山山頂で

ホームページを開設しました

念願のホームページを開設しました。花と登山の記録を中心に構成しています。

花のコーナーは中国新聞の記事を見て撮りに行った山野草、クラブの登山で撮った花や故郷の山の花などを掲載。

登山のコーナーではクラブの登山を写真で紹介。①小鳥のさえずりが聞こえてくる樹林帯②荒い息遣いが聞こえてくるような急坂③さわやかな風の稜線④頂上にたどり着いた時の感動―などの写真や、ことし初挑戦の冬山登山の写真も載せています。

会報も掲載しています。インターネットを楽しんでいる会員には二十九号からは配布しません。ホームページから保存してください。花や登山の情報を待っています。また、山に興味はあるが「クラブには…」という人でも結構ですので誘ってください。

ホームページのアドレスはhttp://www.hiroshima-cdas.or.jp/home/nhanya/index.html

（N）

雪山が誘う幽玄の世界
男３人子供に返る

「ここはふしぎな世界であった。地球の古い古い荒々しくも華やかな地肌の隆起。ばく大な雪と岩が、なにかを、なにか人を魅し、圧倒し、厳粛にさせるものを形造っていた」。

学生時代愛読した北杜夫の「白きたおやかな峰」の一節です。その時の私には自分がそのような状況に出くわすとは夢にも思っていなかった。

しかし、今、私達三人の前にはまさにその、「ふしぎな世界」が眩然と広がっている。古事記の比婆山は一メートルを超す大雪で私達を歓待してくれた。

いつもは後を歩くＦさんが満面の笑みを浮かべ先頭を切って歩く。Ａさんも「えーの。おーい、ええのお」と独りごとながら感激のし通しだ。私は雪の上を転げ回り子供に戻った。あきらかに私達の気分は高揚していた。口には出さなかったが、「これって映画の不朽の名作『スタンドバイミー』とそっくりじゃ」と思った。年齢も考え方も違う男三人が一致団結してマーキングを探したり、交代で一番しんどい先頭を歩いたりして助け合う。たった一日の雪山登山だったが心は一つに結ばれた。「男の友情っていいよな」と私は大感激。

（でも心の片隅には、この二人がヒッキーと今井絵理子ちゃんだったらもっと楽しかっただろうな、という思いが少しありました。すいません）

今回の登山前にＮさんから「残雪が少しあるらしい」という情報を得ていたが、そんなレベルの問題じゃなかった。カンジキ借りてなきゃ死んでましたよ、まじで。

出雲峠を過ぎると早くも銀世界。みんな少なくとも三回ずつ位転んだ。今回、どういう訳かいつもは元気なＡさんが最後尾を歩く。「ひょっとして齢には勝てないのか」と思ったが、実は新しい登山靴だったのでひどい靴ずれになっていた。それでも根性で登ってたんです。Ａさん、大変でしたね。

さて、烏帽子山の頂上はガスが立ち込め、下り口を探すのに一苦労。三人必死な形相でマーキングを探した。

比婆山では神に謝らんといけないことになってしまった。雪に覆われた御陵の上を歩いちゃったんです。神様、勘弁してね。雪の中をさまよいやっとご飯を食べる池ノ段に到着。定番のコンビニ弁当とビール。この日は特別おいしかった。

下山時、県警のヘリが頻繁に飛んでいる。「私達を捜索に来たんじゃないの」「手を振るなよ、大変なことになるで」。私達は徹底して無視した。

私にとって初の雪山体験。なんかはまっちゃいそう。「残雪恋し山男…」って歌の意味がよく分かりました。

Ⓜ

仲間と登った山を忘れない

遠くに春の足音を聞くような二月の晴れた日、中国登山クラブの仲間と大竹の河平連山に登った。Ｎさん、Ｉさん、Ａさん、Ｆさん、Ｍさんの五人とである。車二台にわかれ、登山口を目指した。が、目印の農協の建物に気付かず通過してしまった。大急ぎで戻り、なんとか登山口を発見した。道はしっかりしていたのでどんどんと登っていった。

河平連山には○号峰から八号峰までの九つのピークがある。山梨の八ヶ岳のミニ版である。途中では宮島がみえた。日陰には残雪があった。一つのピークは大きな岩の集まりだった。岩と岩との間にはけっこうな隙間があり、Ｎさんがひょいと飛び越えたのには驚いた。さすが、会長である。

そこから小さなアップダウンが続き、昼飯を食べる頃には「けっこう歩いたな」という気分だった。注目の昼飯はタラかなにかの鍋。ピークはわりと暖かく、みんなで楽しく談笑した。もちろん、ビールもとてもうまかった。視界はよかったと思うのだが、酔っていたのかあまり覚えていない。

さらに、いくつかのピークを踏み下り始めた。何ケ所かに補助のためのロープがついていた。順調に山を下り、帰り道では男四人でかわいいクレープを仲良く食べた。

この山がＴ社の社員として登る最後の山になった。会社を辞めることはメンバーには知らせていなかった。途中で言い出そうとも思ったが、言えなかった。広島に来て三年。白滝山、由布岳、氷の山など登山部の仲間と登った山は忘れがたい。とにかく楽しかった。

先日、『山梨百名山』という本を買った。まだ、ひとつも登ったことがない。写真を眺めながら、登りたい山に印をつけた。ひまを見つけて出かけていこうと思っている。みなさんのお越しもお待ちしています。

四月六日　（Ｔ）

（メールで原稿を送ってくれました）